

ロシア語母語話者による日本語音声の縦断データの紹介

小熊利江（東京大学・ゲント大学）
rieoguma@hotmail.com

【要約】

本研究の目的は、ロシア語母語話者による日本語音声の習得過程ならびに習得上の困難点を明らかにすることである。本稿では研究の概要を紹介し、研究手法やデータ収集の方法、分析方法などについて具体的に示す。その上で、モスクワにおいて2013年、2015年、2016年、2017年に実施された4回の縦断調査によって収集されたデータについて詳しく記し、現在の進捗についてまとめ、研究の中間報告とする。

1. はじめに

外国語学習において音声コミュニケーション能力の習得は、学習者からのニーズの高い分野である。しかし、第二言語としての日本語教育研究において、音声コミュニケーションの研究は大きく後れているのが現状である。

日本語教育に長い歴史を持つロシアにおいても、ロシア語を母語とする日本語学習者の音声について実証的研究はほとんど行われていない。仲矢・稲垣の研究（2005）では、ロシアおよびNIS諸国の日本語教師に対する調査が行われているが、それによると「文法対訳法と徹底した暗記練習と翻訳練習を中心とする教授法」がロシアの外国語教育方法の特徴である。また、現地の日本語教師の不得意分野として、第1位に「アクセント・イントネーション」の指導が挙げられている。第2位は「表記（漢字）」、第3位は「音声」であると述べられている。

教師の不得意分野として挙げられている日本語の音声教育について、渡辺（2011）は、ロシア語圏の日本語教師には音声指導を行うための十分な知識がなく、学習者からの発音改善の要求に応えられていないと述べている。筆者の2011年から2014年までのモスクワの大学での日本語教育経験においても、日本語を教える教員が自身も日本語の音声教育を受けた経験がないため、学生への音声教育の実施に自信がないとの声が聞かれた。

ロシアの日本語教育では、話し言葉である音声より書き言葉である文献の学習が重要視されているように見受けられる。マシニナ（2009）は、ロシアには知識重視の言語学習観があると述べている。また藪崎（2007）の研究においても、ロシアの日本語教育では主に伝統的な学問観あるいは言語教育観をもとに日本語教育が行われていると述べられている。そのため、文法や語彙など書き言葉に表れるような伝統的な言語分野の研究が多く行われているのではないかと考えられる。

ロシア語母語話者の日本語音声習得には、どのような困難点があるのだろうか。本稿では、2013年から2017年にかけてモスクワで行われた、ロシア語母語話者を対象とした日本語音声習得研究の縦断調査の概要を記す。その上で、約4年半にわたって行われた4回の縦断調査によって収集されたデータや分析作業について具体的に紹介する。さらに、現在の研究の進捗を報告し、本研究の中間報告と

したい。

2. 先行研究

ロシア語母語話者の日本語音声はどのように不自然なのかという点について、研究者の内省や学習者自身の内省をもとにした研究がいくつか行われている。さらに、ロシア語母語話者の日本語音声日本人にどう評価されるのかという観点からも研究が行われている。

助川の研究（1993）では、ロシア語研究者 1 人の内省によるロシア語母語話者の日本語音声の特徴が記されている。また、戸田の研究（2006）では、ロシア語母語話者 19 人に自身の日本語の発音の問題点を内省させ、自由記述させた調査結果が示されている。そこでは、ロシア語母語話者にとって難しい発音として、音の長さ、アクセント、イントネーション、シジチの発音、ラリルレロの発音などが挙げられている。渡辺の研究（2011）は、ロシア語圏で日本語教育に携わる日本語母語話者（以下、「日本人」とする）の内省によって、ロシア語母語話者の日本語音声の評価した結果が記されている。それによると主に、単音、特殊拍、アクセント・イントネーションなどが不自然な音声的特徴であると述べられている。

実際にロシア語母語話者の音声をを用いて評価を行った研究としては、渡辺・松崎の研究（2014）がある。ロシア語母語話者の日本語音声について、日本人教師と一般日本人とロシア語母語話者教師の 3 者による評価を比較した結果が述べられている。単音とアクセントに関してはロシア語母語話者教師が日本人より厳しい評価であり、リズムに関してはロシア語母語話者教師が日本人より長音化に厳しく短音化に寛容であった。現在、ロシア語母語話者である日本語学習者の音声に関する実証的研究は十分に行われておらず、音声習得の実態が明らかにされているとは言えない状況である。

ロシア語母語話者の日本語音声に関しては研究が少なく、本研究によって収集された音声データ自体が希少なものである。本研究のデータは、音声指導の方法や教材を考案するための基礎的な資料となり得るだけでなく、ロシア語母語話者による日本語音声を縦断的に収録した貴重なデータとして価値が高いと言える。

3. 研究の目的

本研究の目的は、ロシア語母語話者による日本語音声の習得過程や習得上の困難点について明らかにすることである。日本語音声の習得過程を体系的に明らかにすることにより、音声指導の方法および音声指導教材を考案するなど音声教育に役立てることを目指している。

具体的には、以下の 4 点を研究目的としている。

- 1) ロシア語母語話者による日本語の音声の特徴について明らかにする。
- 2) 横断研究を用いてロシア語母語話者の日本語レベル別の音声習得状況を明らかにする。
- 3) ロシア語母語話者による日本語音声の習得過程について、縦断研究を用いて検証する。
- 4) ロシア語母語話者の日本語音声習得について、習得困難な音声特徴があるかを明らかにする。

4. 研究の方法

日本語を学習しているロシア語母語話者による日本語発話の分析を行い、音声習得の実態を把握する。第二言語習得研究において言語習得の過程を解明するには、1 人 1 人の学習者による実際の習得のプロセスを詳細に記述する縦断研究が不可欠である。本研究では、研究手法として、日本語レベル別

にデータを収集して日本語音声習得の状況について量的分析を行う横断研究とともに、同一の被験者について時間を追って観察する縦断研究を組み合わせ分析を行う。

まず、横断研究からロシア語母語話者の日本語音声の習得状況を明らかにし、その結果をもとに習得過程を予測する。さらに、同一学習者について時間を追って調査し、横断研究から得られた習得過程の予測を、縦断研究によって検証する。

また、学習者による音声の習得研究を行うためには、自然発話スタイルの音声を分析することが最適な方法であるとされている。自然発話スタイルの発話においては、学習者が発話の内容に意識を集中させるため、自身の発音に注意を向けにくくなる。そのため、学習者の本来の習得状況が測定しやすくなるのである。本研究では、自然発話スタイルの音声として、独話形式 2 種類と対話形式 3 種類の発話を分析の対象として用いることにした。

5. 収集したデータの種類

本研究のために収集した音声データは、以下の 5 種類である。データ収集には 1 人につき約 3 時間かかり、調査の参加者には謝金を支払った。また音声収録は、OPI 日本語インタビューテスト資格を持つ研究協力者に依頼した。

- (a) ストーリー・テリング (1-4 分) : 5 コマまんがのストーリーを話す。
- (b) ストーリー・テリング (1-4 分) : 4 コマまんがのストーリーを話す。
- (c) ロール・プレイ「依頼」(3-5 分) : アルバイト先の仕事の日数を減らしてくれるよう依頼する。
- (d) ロール・プレイ「断り」(3-5 分) : アルバイト先の店で頼まれた調理の仕事を断る。
- (e) インタビュー (30-50 分) : 過去に関する質問、現在に関する質問、未来に関する質問、意見陳述するような質問などを受け、約 14 の話題について話す。質問の例として、昨日の出来事、小学校・中学校・高校で好きだった先生の思い出、日本語学習の動機・日本に対する関心事、日本の本や映画やドラマの話、出身地の料理や食べ物や有名な産物、推薦できる観光スポット、将来どんなことがしたいか、どんな仕事につきたいか、もし 10 年か 20 年後に住むとしたら都会がいいか田舎がいいか、お金と時間とどちらがあった方がいいか、などがある。

また、上記の音声データを収集すると同時に、各学習者に対して日本語能力測定テストを行った。使用した日本語能力測定テストは、以下の 2 種類である。

- (A) SPOT90 (10-15 分) : 運用力測定のための聞き取り形式のオンライン文法テスト
- (B) J-CAT (30-60 分) : 聴解、語彙、文法、読解の 4 分野からなるオンライン日本語能力判定テスト

6. 縦断データの内容

2013 年にモスクワにて調査を開始し、ロシア語を母語とする日本語学習者 52 人による日本語の自然発話スタイルの音声を収録した。その後、2015 年にも同様の調査を行い、2013 年に調査を受けた学習者のうち 24 人と新たに調査に参加した 4 人の学習者について音声を収録した。それに続き、2016 年と 2017 年にもモスクワにて同様の調査を行い、ロシア語母語話者による自然発話スタイルの音声を収録した。

これら 4 回の調査で収集されたデータの概要について、以下に詳しく紹介する。

- (1) 第 1 調査 : 2013 年 5 月

対象 : モスクワで日本語を学習する大学生 52 人

学年：1年生16人，2年生8人，3年生10人，4年生10人，5年生8人

日本語レベル (J-CAT)：初級 1人

中級 46人 (中級前半11人，中級17人，中級後半18人)

上級 5人 (上級前半4人，上級1人)

(2) 第2調査：2015年3月 (第1調査の対象者と新たに参加した学習者4人)

対象：28人 (3年生9人，4年生8人，5年生9人，卒業生2人)

(3) 第3調査：2016年5月 (第1，2調査の対象者)

対象：15人 (4年生9人，大学院生2人，卒業生4人)

(4) 第4調査：2017年11月 (第1，2，3調査の対象者)

対象：7人 (4年生1人，大学院生4人，卒業生2人)

7. 音声データの分析作業

モスクワでのロシア語母語話者による日本語の自然発話スタイルの音声収録と並行して，これまでに収集された音声データの文字化と分析も進めている。自然発話スタイルの音声データであるため，実際に音声を聞いて聴覚的に評価を行った結果をもとに分析を行うことにした。

聴覚評価の具体的な作業は，ロシア語母語話者の発話音声を聞き日本語として不自然な発音があった場合，それを書き出した上で，どのように不自然かを記すというものである。聴覚的な判断を行いそれについて記述するには，専門的な知識や経験が必要とされるため，評価は日本人である日本語音声学の研究者や日本語教師などに依頼した。

音声データのうち学習者が独和形式で発話しているものが最も評価が容易なため，調査の対象として，まず独和形式の音声から聴覚評価を開始した。聴覚評価を行うために，学習者の音声を編集して評価用ファイルを作成するとともに，評価内容を記すための回答用紙を作成した。聴覚評価の協力者には，作業時間に応じて謝金を支払った。

現在，各評価者からの聴覚評価の結果を集計し分析を行っているところである。今後は，以下の作業を順次行う予定である。まず，2013年に収集した52人の音声データの評価結果を分析し，ロシア語母語話者の日本語能力レベル別の音声の特徴および音声習得上の難易について明らかにする。その後，各学習者の日本語能力レベルと音声習得状況を照らし合わせ，ロシア語母語話者による日本語音声の習得過程の予測を行う。さらに，2013年に収集した音声データと，2015年，2016年，2017年の同一学習者の音声データの評価結果を対照し習得過程の予測を検証する。

8. おわりに

本研究は，ロシア語母語話者による日本語音声の特徴や習得上の困難点について明らかにすることを目的としている。最終的には，ロシア語母語話者の日本語音声の習得過程を体系的に明らかにすることにより，音声指導の方法および音声指導教材を考案するなど日本語の音声教育に役立てることを目指している。現在，約4年半にわたり縦断的な音声データ収集を行ったが，分析の途上であるため，本稿では4回の調査と収集されたデータならびに分析作業について具体的に紹介することで，研究の中間報告とした。

今後は，ロシア語母語話者の日本語音声習得上の困難点や特徴について分析を行う予定である。約4年半にわたる貴重な発話音声データを分析することによって，ロシア語母語話者による日本語音声の

習得過程を明らかにしたい。

謝辞

本研究の実施においては、筑波大学留学生センターが開発した TTBJ (SPOT90) および J-CAT を使用しました。TTBJ の詳細は「<http://ttbj.jp/>」、J-CAT の詳細は「<http://www.j-cat.org/>」をご参照ください。

本研究の調査で用いた手続き、内容の一部については、JSPS 科研費 (課題番号 24251010 「海外連携による日本語学習者コーパスの構築—研究と構築の有機的な繋がりに基づいて—」 代表者 迫田久美子) を参考に作成しました。

本研究は、JSPS 科研費 (課題番号 26884014 「ロシア語母語話者による日本語音声習得—教材開発と音声習得理論の構築を目指して—」 代表者 小熊利江)、および JSPS 科研費 (課題番号 16K02797 「ロシア語を母語とする日本語学習者の音声習得研究—第二言語習得理論の構築のために—」 代表者 小熊利江) の助成を受けたものです。

ここに改めて、調査にご協力いただいた皆様にお礼を申し上げます。

参考文献

- (1) 小熊利江 (2014) 「ロシア調査」『2012 年度科学研究費研究報告書』111-112. 科学研究費助成事業「海外連携による日本語学習者コーパスの構築—研究と構築の有機的な繋がりに基づいて—」(基盤研究 A, 課題番号 24251010, 研究者代表: 迫田久美子)
- (2) 小熊利江 (2016a) 「ロシア語母語話者の日本語音声に関する習得研究」『日本語教育連絡会議論文集』vol.28, 日本語教育連絡会議, 12-18.
- (3) 小熊利江 (2016b) 「ロシア人による日本語発話の縦断的データの紹介」東京音声研究会例会 配布資料.
- (4) 国際交流基金 (2002) 『ロシア・NIS 諸国日本語事情 (日本語教育国別事情調査)』
https://www.jpf.go.jp/j/publish/japanese/russia_nis/pdf/03.pdf (2018 年 2 月 20 日閲覧)
- (5) 国際交流基金 (2014) 『ロシア (2014 年度) 日本語教育 国・地域別情報』
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/russia.html> (2018 年 2 月 20 日閲覧)
- (6) 国際交流基金 (2017) 『海外の日本語教育の現状 2015 年度日本語教育機関調査より』国際交流基金編
- (7) 助川泰彦 (1993) 「母語別に見た発音の傾向—アンケート調査の結果から—」『日本語音声と日本語教育』文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」D1 班 平成 4 年度研究成果報告書, 187-222.
- (8) 戸田貴子 (2006) 「音声教育へのニューズアンケート調査から分かること—」『第二言語における発音習得プロセスの実証的研究』平成 16 年度~17 年度科学研究費補助金基盤研究(c)(2) 研究成果報告書, 89-137.
- (9) 仲矢信介・稲垣滋子 (2005) 「ロシア・NIS 諸国への日本語教育支援再考」『日本語教育』127, 51-60. 日本語教育学会
- (10) マシナ, アナスタシア (2009) 「ロシアの高等教育機関における日本語教育—極東国立人文大学における日本語教育の実情と問題点—」『外国語教育研究センター紀要 外国語教育フォーラム』3, 64-74. 金沢大学外国語教育センター
- (11) 荻崎義雄 (2006) 「ロシアにおける日本語教育の現状と問題点」『創価大学大学院紀要』28, 149-172. 創価大学

- (12) 渡辺裕美 (2011) 「ロシア語母語話者の発音の特徴と指導における問題点－日本人日本語教師に対する調査から－」 『日本語教育紀要』 7, 国際交流基金, 71-84.
- (13) 渡辺裕美・松崎寛 (2014) 「発音評価の相違：日本人教師・ロシア人教師・一般日本人の比較」 『日本語教育』 159, 61-75.